

11月号 営農インフォメーション

水稲・麦・大豆の管理のポイント

水稲・・・引き続き土づくりの指導をお願いします。

麦・・・排水溝を設置・確認、播種の時期となります。

大豆・・・適期収穫を行うため、収穫時期の見極めが重要です。

水稲

次年度の水稲作付けに向けた土づくりの準備を始めている農家もおられますが、これから取り掛かれる農家に対して、当JAの土づくり肥料「田華の豊稲」の施用をすすめてください。

《田華の豊稲に含まれる成分》

アルカリ…土壌の酸性化を防ぎ、カドミウムの吸収を抑制することにも役立ちます。

けい酸……①葉が硬くなり、葉いもちや病害虫に強くなります。

②茎が丈夫になり、倒伏に強くなります。

③葉が直立し、光合成を受けやすく、登熟・品質向上につながります。

リン酸……①生育が盛んになり、茎数確保に役立ちます。

②葉の伸びが良くなり、茎が健全な状態になり倒伏に強くなります。

③葉から籾への養分移行がしやすくなり、品質・収量が安定します。

苦土……葉緑素の構成要素で作物には欠かせない要素になります。

微量要素……鉄、マンガン、亜鉛、銅など



稲わらや籾殻のすき込み

稲わらは貴重な有機物となるので、焼かずにすき込むよう指導してください。稲わらがよく腐らないと、代かき・移植時の作業性が悪くなり、初期生育時に窒素不足を起こすことがあります。稲わらや籾殻を完熟させるためには、「水分」と「酸素」と微生物の栄養源となる「窒素成分」が必要です。石灰窒素を施用することで、稲わらの腐熟を促進することができます。

石灰窒素の施用基準

乾田の場合 20kg / 10a

半湿田の場合 10kg / 10a



腐熟促進に石灰窒素を！

※環境こだわり米では使用できる化学窒素量が限られていますので注意が必要です。

堆肥の施用

堆肥等の有機物の施用は、土づくりにとって重要な作業です。近年温暖化が管内の米生産においても、収量・品質に大きな影響を及ぼしています。水稻は昔から『地力でつくる』と言われるほど、地力は収量に大きく影響します。近年の温暖化や田畑輪換により地力が低下していることも考えられます。積極的な土づくりで地力の素となる土壌中の有機物含量を維持向上させ、安定生産・収量アップにつなげましょう。新ふりかけ堆肥 eco は、通常堆肥の 1/10 の量の施用で土づくりが実施できます。稲わらと鋤き込むことにより、さらに有機物含量を向上させ安定生産・収量アップが期待できます。



新ふりかけ堆肥 eco

施用量：100～200 kg

施用時期：収穫後～翌年 3 月まで

小麦

全層施肥基準

	肥料名	施肥量 kg/10a	施用時期
土づくり	はたけ太郎	100	10 月下旬
基 肥	化成肥料 14-14-14 or 化成肥料 20-0-10	30 20	11 月上旬
	化成肥料 14-14-14 or 化成肥料 20-0-10	20 15	
穂 肥	化成肥料 20-0-10	20	2 月下旬～3 月上旬
実 肥	硫 安	20	4 月下旬

2 タッチ体系

	肥料名	施肥量 kg/10a	施用時期
土づくり	はたけ太郎	100	10 月下旬
基 肥	セラコート R2500	30	11 月上旬
穂 肥	セラコート R2500	30	2 月下旬～3 月上旬

一発体系

	肥料名	施肥量 kg/10a	施用時期
土づくり	はたけ太郎	100	10 月下旬
基 肥	麦パンチ	40	11 月上旬
実 肥	硫 安	20	4 月下旬

- ※ 一発肥料『麦パンチ』施用の場合は、追肥・穂肥の必要はありません。
- ※ 一発肥料は、その年の気候条件で肥料の溶出具合に影響を受けます。
- ※ 詳しくは令和6年産麦施肥設計書・資材申込書を確認してください。



① 種子更新

自家採種を繰り返していると、品種固有の特性が薄れ品質等にバラツキが見られるようになります。品種固有の特性維持のためには、毎年の種子更新が必要となります。

② 種子消毒

麦の病気において、^{はたかくろほびょう}裸黒穂病・^{くろほびょう}なまぐさ黒穂病・^{はんようびょう}斑葉病は種子伝染する病気です。発病してからの防除は困難であるため、種子消毒は必ず実施してください。

農薬名	使用量	使用回数	使用時期	使用上の注意	適用病害虫
 ベンレートTコート	乾燥種子重量の 0.5%	1回	播種前	機械播種用の 粉衣処理専用剤なので、 浸漬処理は行わない。 【種子 10kg に対し、薬剤 50g】	斑葉病 なまぐさ黒穂病 裸黒穂病 条斑病

③ 播種

播種は早すぎず遅すぎず、天候ならびには場状態を確認して適期播種をしてください。早播きすると初期生育で軟弱徒長となり、寒害や雪害を受けやすく、黒節病も発生しやすくなります。一方、遅播きすると発芽不良になりやすく、目標茎数の確保ができず減収になることがあります。

また、土が十分に乾いていない状態で無理に播種すると、出芽・苗立ちが悪くなり、その後の生育にも悪影響を及ぼすので、ほ場の条件によっては、播種期間内で乾かしてから行うましょう。

※特に湿田では麦を行わないか、排水対策を徹底し、作業してください。

※12月播種は収量・品質に影響するため極力避けましょう。

● **播種量 ・ 播種時期**

播種量	播種時期
8kg～10kg/10a	11月1日～11月20日頃

※黒節病被害等防止のためにも『ふくさやか』は必ず11月に入ってから播種を行います。

④ 播種後のほ場管理

苗立ちから分けつ期に湿害を受けるようなほ場では、多収で高品質な麦の生産は期待できません。播種前にしっかりと排水対策を実施しておくことはもちろん、播種後も湿害の発生が懸念される時は溝さらえなどを行い、地表に溜まった水が速やかにほ場外へ排水されるような管理が収穫まで定期的に必要です。



大豆

① 収穫

11月は「オオツル・タマホマレ・ことゆたか・フクユタカ」などの収穫時期です。

大豆の成熟期は「葉が完全に落葉し、莢の大部分が褐変し、莢を振るとカラカラと音がする時期です。

刈り遅れると、光沢の悪化や、裂皮粒などの被害粒の増加の危険性があります。合わせて収量減収により大豆の交付金にも影響しますので適期刈取りに努めて下さい。

また、雑草が多いほ場では雑草を抜いてから作業を行わないと大豆に汚れが付着し、汚粒の発生要因になります。

【コンバイン収穫の場合】

成熟期からできるだけ、ほ場での乾燥を促進させて、子実水分 18%以下、茎水分 55%以下（茎がポキッと折れる状態）となってから作業を行い、汚粒の発生を防止します。

刈取り作業は、日中に行ってください。莢水分が高い早朝での収穫は、汚粒発生割合が高くなり、午前8時では、100%近い発生割合になっています。

② 乾燥

水分は 13.5%以下に仕上げます。高水分粒の急激な乾燥は、しわ粒や皮切れ粒の発生を助長しますので、常温通風による乾燥を基本とします。なお、加温する場合には通風温度を常温+5℃以下とします。